

在北京日本公使館の建築と変遷

一片山東熊設計による三代目北京公使館を中心に

Keywords

片山東熊 外務省 東交民巷
四合院 清国 中華民国

1. 研究背景

在北京日本公使館は1873年日清両国で交わされた日清修好条規によって開設された。当初は北京市内の既設住宅を用いての出発であったが、1886年、片山東熊設計により公使館が建設されることとなった。片山東熊は政府関係の仕事が多く行った宮廷建築家であり、建築家として最初の仕事もこの公使館であった。また、初の日本人建築家の在外公館であるだけでなく、現在現存する最も古い日本人建築家による作品としても極めて重要であると考えている。

また、その後も日清・日中関係の変化から改修や増改築が行われていることから、日清・日中関係の変遷を裏付けることのできる建築であるとも考えられる。

既往研究においては、田中重光氏「大日本帝国領事館の建築」、藤森照信氏による「中国近代建築総覧」内の実測記録が本建築を扱っているが、概要や実測当時の様子を述べているのみで、詳細は分かっていない。

2. 研究目的

本研究では、外務省史料館、国立公文書館を中心に史料調査を行い、この史料、図面、写真等を整理・解析することによって以下の二点を導き出すことを目的とする。

(1) 片山東熊設計による在北京公使館の設計経緯や竣工後の改修や増改築の変遷を明らかにする。

(2) 片山東熊と北京公使館の関係、その背景にある清国・中国と日本の関係を考察し、片山東熊の作品内での位置づけ、本建築の日清・日中関係内での位置づけを行う。

3. 研究方法

(1) 外務省史料館、国立公文書館、東洋文庫などで資料調査を行う。

(2) 調査により得られた資料を整理・解析し、北京公使館の建設やその変遷をまとめる。

(3) 文献を読み込み、日清関係の変遷、片山東熊等の関連人物の資料をまとめ・整理する。

(4) 整理・解析した資料を総合した年表を作成する。

(5) 在北京日本公使館と日清・日中関係の変遷を考察し、本建築の位置づけを行う。

4. 調査について

4.1 史料調査

外務省外交史料館、国立公文書館、東洋文庫にて13回の史料調査を行った。表2は、調査によって収集された史料をリスト化したものである。

表1. 収集された史料一覧

NO	名前	数量
1	二代目在北京日本公使館関連史料	5
2	三代目在北京日本公使館関連史料	52
3	四代目在北京日本公使館関連史料	2
4	在北京日本公使館移管関連史料	1
5	片山東熊関係史料一覧	3
6	三代目公使館関連図面資料	7
7	地図	2

5. 片山東熊について

片山東熊は1854年（嘉永6年）1月18日に長州藩士の家の四男として誕生する。1865年（慶応元年）に高杉晋作率いる奇兵隊に入隊し、1868年（慶應4年）の戊辰戦争では討幕軍に加わる。その後、1873年（明治6年）に片山は、工部寮（明治10年に工部大学校となる）に官費生として入学する。そして、専門科で造家学を選択し、当時の造形学科教授、ジョサイア・コンドルの元に学ぶ。1879年（明治12年）に工部大学校造家学科第一回生として辰野金吾らと共に卒業、同年に工部省に入り営繕局七等技師として建築家の道が始まる。

表2. 片山東熊の年表

年号	西暦	出来事
安政元年	1854	萩で長州藩士の家に誕生
慶長3年	1867	奇兵隊に入隊
明治6年	1873	工学専門寮に入寮（造家学専攻）
明治12年	1879	工部大学校一回生として卒業 工部省技師として勤務開始
明治15年	1882	有栖川邸建設のため渡欧
明治17年	1884	工部省准奏任御用掛を命じられる 外務省御用掛兼任を命じられる 北京公使館設計のため北京へ派遣
明治19年	1886	北京公使館竣工に伴い、帰国 明治宮殿装飾の調査のためドイツへ出張
明治30年	1897	東宮御所御造営調査のため欧米へ出張
明治41年	1908	東宮御所竣工
大正元年	1912	明治天皇葬祭場などの建設に関わる
大正5年	1916	勲一等旭日大綬章を授与される
大正6年	1917	死没



AK11061 下雅意 彩奈

6. 初期の在北京日本公使館

6.1 在北京日本公使館の開設

1871年、日清修好条規が調印され、清と日本の国交が開かれた。この条規の中で、お互いに公使を交換し、建物と土地を借用して、公使館を開設することが決められた。そのため、「清國トノ修好条規通商程締結ニ関スル件」によれば、1873年日清修好条規の批准交換の際、公使館の敷地と建物を探すことも目的となっていた。また、公使館をできるまでの間、北京駐在のロシア公使に事務代理を頼むこととなった。そして、翌年の1874年8月、北京市内の既往家屋を借用し、初代在北京日本公使館が開設された。

6.2 在北京日本公使館の移転

1874年に初代公使館が開設されたが、「清国北京公使館買収伺」によれば、翌年の1875年には新たに公使館を購入することが要求されていた。これは、元々外人への不信感があった中、台湾出兵により日本への不信感がさらに大きくなったことが原因であった。また、家賃も高額であったため、購入した方が良くと考え、1878年北京市内の東四牌楼六条胡同に敷地面積2000坪と中国伝統の四合院を購入し、新たに2代目公使館とする。

7. 三代目北京日本公使館の建設

7.1 新たな公使館の購入・改築計画

当時日本とベルギーを除いて、外国公使館はすべて東交民巷にあった。そのため、1883年5月の「清国北京公使館買収費ノ件」によると、新たな公使館の購入が要求されている。その中では、外国公使との交際や国内視察が頻繁になってきており、現在の公使館の位置では不便であることが述べられている。そこで、東交民巷で家屋・地所の搜索を始めるが、価格の騰貴で中々契約に至らなかった。そして、1884年7月修繕や増築が必要ではあるもののようやく購入の目途が立った。



図1. 当時の日本公使館との立地関係
(1875年4月・清国北京全図)

7.2 片山東熊の選定

1884年8月6日、「太政官准奏任御用掛片山東熊外務省御用掛兼勤並ニ清国北京差遣ノ件」により、片山東熊は外務省御用掛兼務を命じられ、在北京公使館の改築設計と工事管理を任されることとなった。この選定には、同年5月のジョサイア・コンドルの解雇など、当時の日本の建築界が外国人技師から日本人建築家へと転換する過渡期であったことが考えられる。その中でも、明治維新の勝者で、同藩出身の山縣有朋の厚い庇護もあった片山東熊が選ばれたと考えられる。

7.3 新たな公使館建設に向けて

在北京公使館の改築設計・工事監理のため、1884年8月20日、片山は北京へ向かった。当時の状況は、清国公使を務めていた榎本武揚が家族に宛てた書簡集「榎本武揚公開書簡集」から窺うことができ、同年10月15日の手紙から、片山の他に大工一人が派遣され、このころには大まかな図面を完成させていたがわかる。

しかし、当時の日清関係は壬午軍乱、甲申事変と二つの朝鮮での内乱を契機に悪化していた。そこで、1885年3月伊藤博文らが悪化した日清関係を打開するため、天津へ談判に訪れた。当初、清国側は強気であり、難航したため、談判の不調を期して、北京公使館の引上げを覚悟した。しかし、最後の談判で無事に全権李鴻章との間に天津条約を締結し、これを回避した。この談判に関して、伊藤の補佐をした榎本公使は手紙で、この決着に一安心したこと、そして、公使館の増築費について外務卿井上馨より一文出せないと言われていたが、伊藤がこの件を請負ってくれたことを書いている。

そこで、同年5月改めて「在清國公使館購入修繕費増額ノ件」が出された。その中では、当時使用していた2代目公使館を解体し、材料を再利用する予定であったが、改めて確認すると腐朽が激しく、再利用が困難であったことが述べられている。榎本公使の手紙からは一度断られていることがわかるが、これは当時の大蔵卿松方正義による財政政策が行われていたからであると考えられる。しかし、今回は伊藤博文が請け負ったため、5月中に大蔵省より増額が許可された。



図2. 伊藤博文



図3. 李鴻章

7.4 3代目在北京日本公使館の竣工

1886年8月ようやく在北京公使館は竣工した。片山は北側の四合院住宅部分を増改築し、ファサードとなる南側部分の新築設計を行った。図4は国立公文書館内閣文庫所蔵の平面図である。この平面図から四合院の平面を生かし、英国のカントリーハウスを参考にしたと考えられる。そして、ファサード部分には片山が卒業論文で推奨したベランダが設けられた。これは、北京の酷暑のために作られたと考えられる。

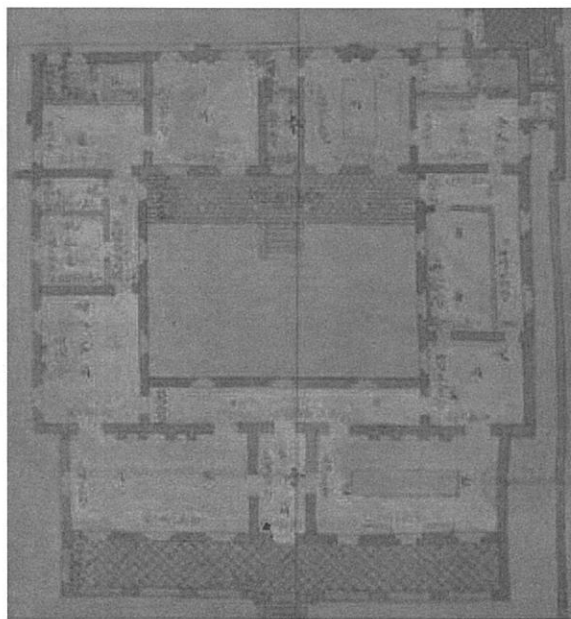


図4. 在北京東交民巷日本公使館之図 (1886年)

構造は煉瓦造で設計されているが、「建築雑誌」第一号第一巻によると、煉瓦を造るセメントに用いる川砂が中国では得るのが難しかったため、石灰と土壌を混ぜ、モルタルの代わりにしたと記載されている。

ファサードを飾る意匠には、中国伝統の精巧で美しい煉瓦彫刻が用いられて第一号第一巻。ペディメントにはアカンサスの図案が用いられ、中央には日本の在外公館を表す菊の紋章が施された。また、柱には鹿や牡丹などの吉祥を表す動植物の図案が用いられている。



図5. 三代目北京公使館の正面外観
(「建築雑誌」第一号第一巻所収)

8. 三代目北京日本公使館の改築と転用

8.1 四代目在北京公使館の新築

1900年清国を擁護し、西洋列強を撃退する「扶清滅洋」をスローガンの下、外国各国公使館や教会を襲う「義和団事件」が起こる。鎮圧後は、各国の公館区域の画定といった義和団事件の最終議定書が締結され、東交民巷は租界のようになっていく。

この事件以降、日本は公使館警備隊として日本兵営を置くこととなり、翌年公使館の北側に施設が竣工する。それを契機として、また新しい公使館の建設が計画されることとなった。そこで、設計と現場監督には真水英夫が起用し、1902年に兵営の北側で工事が開始された。1909年、ロココ風のベランダが特徴的な二階建て煉瓦造りの本館を含め、事務所や表門など新たに公使館一帯が完成した。



図6. 4代目北京公使館 (「北京大観」所収)

8.2 官舎の改善計画

新本館が完成されるも、依然として旧本館構内の官舎はそのまま用いられていた。そのため、1910年1月に「旧館構内我々館員官舎改善ニ関スル件」が送られ、官舎の改善が要求された。当時の旧本館構内には官舎や事務所、公使館警察が密集しており、衛生上良い環境ではなかった。また、特別書記官官舎を始め官舎の多くは旧館と同時に支那家屋を改築したものであったため、古くせまかった。そのため、当時の諸外国公使館だけではなく北京に進出していた三菱会社や正金銀行の役員住宅に比べても劣っており、外交上好ましくない状況であった。

しかし、官舎の新築や大修繕は費用の点から難しく、また、一部の修繕だけでは不十分な状態であった。そこで、旧本館を特別書記官官舎へ転用する計画が提案された。当時、旧本館は空き家となっていたため、余り費用をかけない方法として片山設計の南側部分はそのままとし、後部の物置や僕室のある建物を含め周囲の官舎を取り壊すという計画であった。また、その他の官舎として、現在の特別書記官官舎を書記官官舎に転用・改築することや警察官舎の新築などが申し出られた。しかし、予算の

関係上全てを許可するのが難しく、警察官舎の新築や下水道の新設などの衛生上の改善工事が優先された。

8.3 三代目在北京公使館の転用と改築

衛生面に関して解決されたが、旧本館は依然として空き家のままであった。そこで、1910年7月に「旧本館改造其他工事概算書送付ノ件」が出され、旧本館の改造が求められた。この概算書において、旧本館を取り壊し、新築する計画が述べられていたが、これに対する返答は後方の物置のみ取り壊しが認められ、それ以外の設計変更を行うように求められた。そして、改めて旧本館の西側に和室を増築する計画が提案され、翌年の1911年5月には工事が開始された。

9. 三代目北京日本公使館のその後

9.1 公使館区域の移管

「在外公館修繕費ニ関スル件」によると、1921年には新本館構内で増改築が行われ、同時に旧本館もペンキ塗替えなどの細かな修繕が行われた。そして、旧本館構内では常に変わる中国の情勢に対応するため増加した館員のため、官舎の新築や警察署、警察官舎の改築も行われた。在北京日本公使館一帯は中国の首都、北京にふさわしい公使館となり、1927年の道路改造工事は細かな修繕や増築が繰り返された。

その後も、公使館南遷問題や大使館への昇格など、在北京公使館は日中関係に翻弄されていくが、1937年の日中戦争を始め、日本は戦争へと突入していった。その渦中で、太平洋戦争の前年の1940年に中華民国では、新たに南京国民政府が樹立した。

日本政府は南京政府の成立を歓迎し、1940年には日華基本条約を締結し、正式に承認した。そして、南京政府も太平洋戦争への参戦を決定し、これを契機として南京政府の政治力強化のため、「大東亜戦争完遂ノ為ノ対支処理根本方針」が決められた。

その方針の一つとして、「北京公使館区域移管ニ関スル件」が提案され、イタリア、フランス、スペインと共に北京公使館区域を還付することに同意した。そして、措置要領として道路や下水道などの各国共同財産の無償移譲など細かく決められ、国民政府還都記念日である1943年3月30日に在北京日本公使館一帯を中国側へ移管した。

10. 総括

在北京日本公使館は片山東熊にとって設計から施工管理まで行った最初の作品であり、日本人建築家が活躍する先駆けの作品となった。竣工後も、外交のために新築や増築が行われ、特別書記官官舎になった後も修繕が繰り返され、現在は中国の文化遺産指定である全国重点文物保护单位の一つとして保存されている。

また、着工前から日清関係が大きく関わっており、その後の増改築には常に変化する中国内の情勢や日中関係に翻弄され続けた。以上から、在北京日本公使館は日清・日中関係の変遷を裏付けることのできる建築でもある。

参考文献

- 1) 田中重光 2007「大日本帝国領事館の建築」相模書房
- 2) 藤森照信・汪坦 1993「中国近代建築総覧・北京編」
- 3) 藤森照信・汪坦 1996「全調査東アジア近代の都市と建築」筑摩書房
- 4) 1886「建築雑誌第一号第一巻」一般社団法人日本建築学会
- 5) 榎本隆充編 2003「榎本武揚未公開書簡集」新人物往来社
- 6) 神代雄一郎 1963『近代建築の黎明 明治・大正を建てた人々』美術出版社
- 7) 小野木重勝 1979『日本の建築 [明治大正昭和] 2様式の礎』三省堂
- 8) 藤森照信 1979『日本の建築 [明治大正昭和] 3国家のデザイン』三省堂

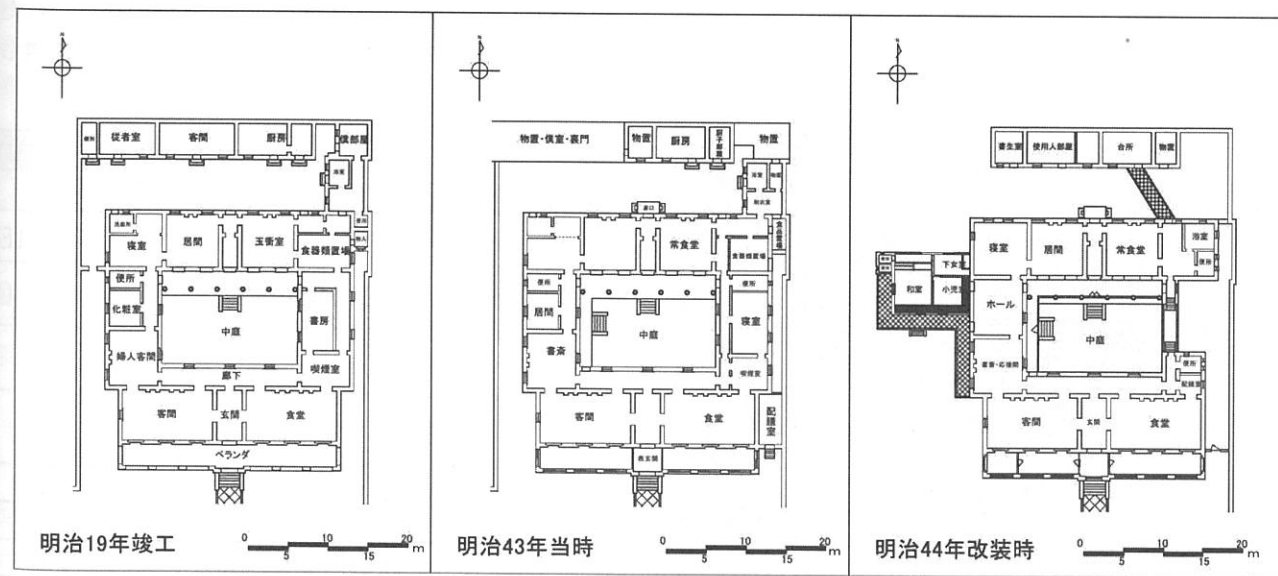


図7. 在北京日本公使館 平面変遷